

語の同一性について—アポーハ論の視点から

On the Identity of a Word—from the Viewpoint of Apoha Theory

上田 昇
Noboru UEDA

Keywords : Dignāga, Saussure, Walras, Marx

キーワード：ディグナーガ、ソシユール、ワルラス、マルクス

はじめに

古代インドの宗教諸派は知識論の伝統を有するが、その中に、人間の知識は何を量（プラマナ：尺度・根拠・手段）とするかという問題がある。ヴェーダ聖典を信奉する学派は聖典はそのまま量であると主張した。類似の立場を仏教に移せば、仏教の聖典はそのまま量であるということになる。仏語（仏陀の言葉）は無条件に真実であり、人間の知識の根拠となる。知識根拠たる聖典ないし聖典による知識は声量こえりょうと呼ばれた。

声量の他に量の候補として論じられたもののうち、代表的なものとして現量（直接知覚）および比量（推論）がある。何を量として認めるかは学派によって様々であったが、仏教には声量・現量・比量の三量を認める立場の他に、現比の二量のみを認めて声量を独立した量とは認めない立場があった。この現比二量論を説いたのがディグナーガ（陳那、6世紀頃）であった。

ディグナーガは声（言葉）による知識は比量に他ならないとする。その理由を、言葉による知識獲得のあり方が、比量（推論）による知識獲得のあり方と同じだからであると言う。そのあり方をディグナーガは「他の排除（アポーハ, apoha）」と呼ぶ。つまり、かの山に火があることが煙によって知られる際、煙が「火の無い場所」を排除（apoha）するのと同様に、言葉の意味が知られる際、言葉は他の言葉の意味を排除する。そのような「排除」に基づいて言葉の意味が知られるのである。このように説いて、ディグナーガは現比二量を宣言する。

はたして声量を比量と見ることが妥当か否かは問わない。目下我々の関心事は、言葉（語）の意味を「他の排除」とするディグナーガのアポーハ論に拠って如何なる言語論が描けるであろうかということである。

1. 語のアポーハ論的意味

ディグナーガはアポーハ論を展開するために上位語・下位語（普遍語・特殊語）による階層構造的な語群を設定している。アポーハ論が展開される『集量論』第5章全体が一つの一定の語群を前提にしているとは思えないが、要所要所でディグナーガは上位語・下位語関係を設定してアポーハ論を論じている。「語 (śabda) の意味は他の排除である」とするディグナーガのアポーハ論の基本命題は、このような上位語・下位語構造において捉えられなければならないと思う¹⁾。

今はアポーハ論の内容には立ち入らないが、ディグナーガの述べることを勘案すると、諸対象への適用の可否が決まっている一連の語からなる一つの語群を所与として、その語群に基づいて語の意味 (artha) を定めることが考えられる。そのとき、「被覆 (covering)」なる概念を導入する。すなわち、対象の集合sの「被覆」を、sの少なくとも一つの要素について適用されることが適正な語の集合として定義する。そして、当該の語群に含まれる語Xのアポーハ論的意味 (artha) を、事実上語Xの外延の補集合の被覆として定義する。要するに、語Xを名前として持たない対象が持つ名前を列挙して、それらを語Xの意味 (artha) とするのである。

拙論 (2016a) では、被覆を用いた語の意味 (artha) の定義を否定名辞や複合語にも拡張するために、所与の語群に基づいて作られる「アポーハ代数」を用いて論理式²⁾ (拡大された語) の「外延」および「意味 (artha)」を定義した。所与の語群における語を命題変項とする論理式Pについて、事実上、

$$\text{artha}(P) = \text{cov}((h[P])^c)$$

によって、語Pのアポーハ論的意味 (artha) が与えられる³⁾。この式は、語Pが適用できない対象の集合((h[P])^c)の被覆を以て語Pの意味 (artha) とするものである。(個々の記号の詳細は拙論参照。covは「被覆」を、h[P]は語Pの「外延」を、(h[P])^cはh[P]の補集合を、それぞれ意味する。[P]は所与の語群から作られるアポーハ代数の要素であり、Pの付値と呼ぶ。)

ここで、アポーハ代数の「同一性 (同型性)」が、当該の語群に基づくオイラー図⁴⁾の (しかるべく定義された) 「同一性」と論理的に等価であることが証明できる (上田2016b参照)。上の等式は、語Pの意味 (artha) がPの付値[P]に依存することを示している。従って、語の意味変化はアポーハ代数の変化に伴って起こる。そして、アポーハ代数の変化は当該の語群のオイラー図の変化と並行する。各語の外延が変動しても、それらが語群のオイラー図の変化に至らなければ語の意味は変化しない。オイラー図の変化に至る外延上の変動のみがいずれかの語の意味 (artha) の変化をもたらすのである。このような意味 (artha) は「価値」と呼ぶに相応しいであろう。ソシユール言語学の影響を受けて、J.トリーアは次のように述べている。

個々の記号が何かをいうというのではない。記号全体の組織だけが、個々の記号に対して何かをいいうるのである。このように、語は同じ概念の「野」ののこりの語とむすびつきあって、自律性をもった一つの全体となり、この全体からその表示の及ぶ範囲が得られる。或る語の通用価値 (Geltung) は、それに隣接し、またそれに対立する語の通用価値に対して限定するときにはじめてよくわかるようになる。全体の部分としてのみその語は意味をもつ。なぜなら「野」の中にしか、意味するということは存在しないからである。

(J. Trier, Ueber Wort- und Begriffsfelder [「語の野」と「概念の野」について] 福本・寺川編訳『現代ドイツ意味理論の源流』大修館 1975 所収 p.156)

いま、アポーハ論的に比較的説明しやすい「価値」として、ソシュール自身の言から次の二つを取り上げる。

「ドイツ語もしくはラテン語の複数をもつ価値 (valeur) は、サンスクリットの複数をもつ価値ではないが、その意義 (signification) は同じである。その理由は、サンスクリットには双数があることによる。」

(丸山 1981, p.148. 補足したフランス語は、丸山 1985, p.307右に拠る。)

「mouton (羊、羊肉) は英語の sheep (羊) と同じ価値を持っていない」(Ibid., p.219)

アポーハ論的に解釈するなら、前者は、ドイツ語やラテン語の場合は文法的な数を表す語群は {単数、複数} であり、従って artha (複数) = {単数} であるのに対し、サンスクリットの場合は {単数、双数、複数} であるから、artha (複数) = {単数、双数} となり、「複数」の価値 (意味、artha) は両者で異なる、ということになる。ここで、artha の計算の為には「単数」「複数」「双数」についてそれぞれ外延 (当該の語を名前として持つ対象の集合) を設定する必要があるが、適当な単語の単数形、複数形を、そしてサンスクリットの場合はさらに双数形を (少なくとも) 一つずつ設定すれば良い (語の artha の求め方について詳しくは上田 2016a,b 参照。これらの語群のオイラー図は、ドイツ語とラテン語の場合は、いずれの場合も、互いに交わらない二つの円となり、サンスクリットの場合は同様に三つの円になる)。ただし、いずれの語群における「複数」も同一語でなければならないが、この「同一性」はこのような外延の同一性に拠っては得られない。ドイツ語、ラテン語、サンスクリットはそれぞれ異なる言語だからである (ドイツ語の「複数」の外延はドイツ語の単語から成り、ラテン語のそれはラテン語から成る)。従って、我々は「複数」の同一性の根拠を文法用語としての内包的意味 (上の引用で言う意義) に求める必要があるであろう。

また、後者は、アポーハ論的な言い回しを用いれば、英語 sheep は羊の肉 (mutton) を排除するが、フランス語 mouton は羊の肉を排除しない、ということになる。この相違はフランス語と英語での羊に関連する語のオイラー図の異なりとして表せるであろう (図 1。ただし、

一語だけのオイラー図は無意味であるから、フランス語の場合は他の語の外延を表す円が省略されているものとする。

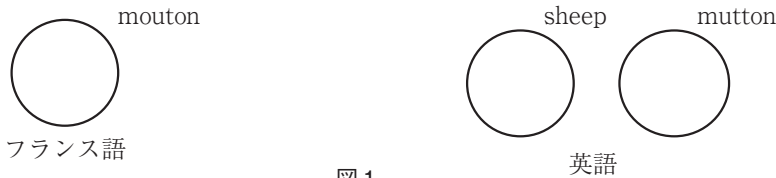


図1

2. アポーハ論的意味 (artha) と価値形態論

語群 ω を所与として、 ω の要素を命題変項とする論理式(拡大された語)Pについて、そのアポーハ論的意味(artha)を

$$\text{artha}(P) = \text{cov}((h[P])^c)$$

と定義した(前節)。この等式は語Pの意味(artha)が語群 ω の冪集合(部分集合を要素とする集合)の要素として表されることを意味する。例えば、語群 ω が次のオイラー図(図3)で表せるとする。このとき、 $\text{artha}(A) = \{B, C\}$, $\text{artha}(B \vee C \vee D) = \{A\}$ などとなる。

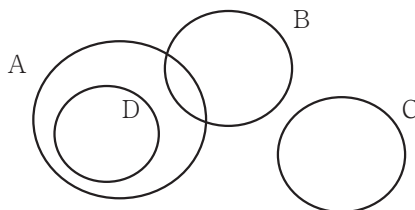


図3

一般に、 $\text{artha}(P) = \alpha$ ($\alpha \in \omega$ の冪集合)である。つまり、語の意味(artha)は語の集合として表される。ここでいま、 α をその全ての要素の選言から成る語と見なすことにする。上の例で言えば、語Aのarthaすなわち $\{B, C\}$ を $B \vee C$ 、また語 $B \vee C \vee D$ のarthaすなわち $\{A\}$ をAと見なすのである(ただし、選言肢の順序は無視する。例えば、 $B \vee C$ と $C \vee B$ は「同一」と見なす)。すると、次の図式が得られる。

語の意味(artha) = 語 (ここで、左辺の語と右辺の語は異なる)

いま、語Xの意味(artha) = 語Yのとき、 $\text{artha}_2(X) = Y$ と表すことにすると、上のオイラー図の場合、 $\text{artha}_2(A) = B \vee C$, $\text{artha}_2(B \vee C \vee D) = A$ などとなる。

語の意味(artha) = 語 と類似の図式がある。『資本論』の価値形態論に事実上見られる図式、

商品の価値 = 商品 (ここで、左辺の商品と右辺の商品は異なる)

である。

『資本論』の価値形態論は商品の価値が如何にして貨幣形態(第四形態)に至るかを論じる

貨幣生成の論理と考えられるが、まず価値の第一形態（単純な、個別的な、または偶然的な価値形態）において、

$$\text{亜麻布20エレ} = \text{上衣1着}$$

あるいは、この式の基礎として、

$$\text{亜麻布} = \text{上衣}$$

なる等式が登場する。これらの等式に関して、マルクスは次のように言う。

「亜麻布はその価値を上衣で表現している。」（『資本論』第一巻、和訳p.63）

「私は、例えば亜麻布の価値を、亜麻布で表現することはできない。亜麻布20エレ = 亜麻布20エレというのは、なんら価値表現とはならない。」（Ibid., p.64）

「亜麻布の価値はただ相対的にのみ、すなわち、他の商品においてのみ、表現されうるのである。」（Ibid., p.64）

「亜麻布なる商品の価値は、したがって、上衣なる商品の肉体で表現される。一商品の価値は他の商品の使用価値で表現されるのである。」（Ibid., p.68）

我々がここに見いだすことができるのは、第一形態において成立するところの、商品／価値と語／意味の図式的類似性である。すなわち、商品の価値が他の商品として表現されるのと同様に、語の意味（*artha*）が他の語として表現される。

しかし、商品と語のアナロジー（図式的対応）は限定的にしか成り立たない。なぜなら、以下に見るように、商品の場合、商品Aの価値 = 商品B なる表現は、その逆、すなわち、商品Bの価値 = 商品Aなる表現を含んでいるとされるのに対し、語Xの意味（*artha*） = 語Y（すなわち $\text{artha}_2(X)=Y$ ）は必ずしも 語Yの意味（*artha*） = 語X（すなわち $\text{artha}_2(Y)=X$ ）を含意しないからである。

先ず、『資本論』は次のように言う。

むろん、亜麻布20エレ = 上衣1着 または二〇エレの亜麻布は一着の上衣に値するという表現は、上衣1着 = 亜麻布20エレ または一着の上衣は二〇エレの亜麻布に値するという逆関係を含んではいる。しかしながら、上衣の価値を相対的に表現するためには、方程式を逆にしなければならぬ。そして私がこれを逆にしてしまうやいなや、亜麻布は上衣のかわりに等価となる。したがって、同一の商品は同一価値表現において、同時に両形態に現われることはできない。この二つの形態は、むしろ対極的に排除しあうのである。（Ibid., p.64. 下線は引用者）

一方、語については、先のオイラー図（図3）のような語群の場合、

$$\text{artha}_2(A)=B \vee C$$

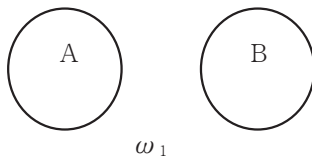
の逆関係、すなわち

$$\text{artha}_2(B \vee C) = A$$

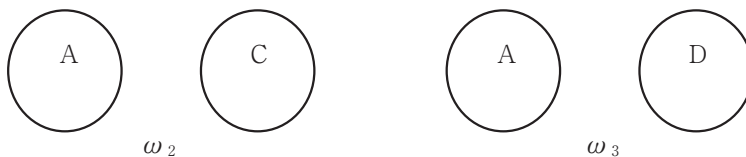
は成り立たない。実際、 $\text{artha}(B \vee C) = \{A, D\}$ すなわち、 $\text{artha}_2(B \vee C) = A \vee D$ だからである。このように、語の場合は等式の左辺と右辺を入れ替えられないという根本的な制約が存在する。従って、価値が貨幣に至る論理を類比的に語一般について貫徹することはできない。なぜなら、第四形態（貨幣形態）の前段階たる第三形態（一般的価値形態）は、下に見るように、第二形態（総体的または拡大せる価値形態）における等式の左辺と右辺を入れ替えて得られる形態だからである。

しかし、極く限定されたタイプの語群を用いて我々は貨幣誕生にまでアナロジーを進めることができる⁵⁾。

いま商品世界は四つの商品種から成るとする。一つの商品種に一つの語を対応させる。先ず次のオイラー図で表される語群 $\omega_1 = \{A, B\}$ を考える（語の外延を円で表わす）。



すると、 $\text{artha}_2(A) = B$ であるが、明らかに逆関係 $\text{artha}_2(B) = A$ も成り立つ。同様に、語群 $\omega_2 = \{A, C\}$ 、 $\omega_3 = \{A, D\}$ を考える。



このとき、 $\text{artha}_2(A) = C$ および、その逆関係 $\text{artha}_2(C) = A$ が成り立つ。同様に、 $\text{artha}_2(A) = D$ 、および $\text{artha}_2(D) = A$ が成り立つ。さらに、 $\omega_4 = \{B, C\}$ 、 $\omega_5 = \{B, D\}$ 、 $\omega_6 = \{C, D\}$ として、それぞれの語群において同様に artha_2 が考えられる。

このように、四種類の商品からなる世界に対して、一組の商品の交換可能性ごとに一つの語群、全部で六つの語群が設定できる。これは第一形態に対応する。

さて、『資本論』における価値の第二形態は「一商品、例えば、亜麻布の価値は、いまでは商品世界の無数の他の成素に表現される。すべての他の商品体は亜麻布価値の反射鏡となる」(p.82) のであり、より具体的には、

亜麻布 20 エレ = 上衣 1 着 または = 茶 10 封度 または = コーヒー 40 封度 または = 小麦 1 ク
ォーター または = 金 2 オンス または = 鉄 1/2 トン または = その他

と表される。

これは、「第一形態の諸方程式の総和から成っているだけである」(Ibid., p.85) とされ、

亜麻布20エレ = 上衣1着
 亜麻布20エレ = 茶10封度 等々

とも書かれる (Ibid., p.85)。そして、「これらの諸方程式のおおのは、だが、両項を逆にしても同じ方程式である」として

上衣1着 = 亜麻布20エレ
 茶10封度 = 亜麻布20エレ 等々

なる第三形態 (一般的価値形態) が得られる。

亜麻布に対応する語をDとすれば、我々のアナロジー (∞で表す) は次のようになる。

第二形態 ∞ $artha_2(D)=A, artha_2(D)=B, artha_2(D)=C$
 第三形態 ∞ $artha_2(A)=D, artha_2(B)=D, artha_2(C)=D$

第三形態における亜麻布20エレ (∞ D) は、やがて左辺に移動して、自らの席を金20オンスに譲ることにより第四形態たる貨幣形態が成立する。金に対応する語をCとすれば、次のアナロジーを得る。

第四形態 ∞ $artha_2(A)=C, artha_2(B)=C, artha_2(D)=C$

第三形態から第四形態への移行は、亜麻布が等式の左辺に移り、右辺に金 (第三形態では左辺にあった) が置かれる形で行われるが、歴史的には、既に第三形態における右辺が金であったと言えるのであろう⁶⁾。すると、我々のアナロジーによれば、(四種類の商品世界における) 貨幣誕生とは、二語 (二項対立) から成る六つの語群が語Cを含む三つの語群に集約されることに他ならない。

上の四種類の商品世界の場合、アナロジーによる語群は $\{A,C\}$, $\{B,C\}$, $\{D,C\}$ の三つに集約されるが、A,B,C,Dをそのまま商品種の名前と見なすことにして、貨幣誕生後の商品Aと商品Bの交換はどのように示すことができるであろうか。それは時間を取り入れることによって可能になると思われる。時点tにおいて商品Aが商品C(貨幣)と交換され ($artha_2(A)=C$)、その後に時点uにおいて商品C(貨幣)が商品Bと交換される ($artha_2(C)=B$)。この一連の事態は、時点tにおける語群 $\{A,C\}$ が時点uにおける語群 $\{B,C\}$ へ変化することとして表すことができるであろう。その変化は語Cの意味の変遷、すなわち $artha_2(C)=A$, から $artha_2(C)=B$ への変遷となって現れる。このとき必要な条件は語Cが両語群を通じて同一であるということ

ある。斯くして、次のアナロジーが得られる。

貨幣（金）の二語からなる複数の語群が、共通の一語を含む語群に集約される
ときのその語。それは語群の時間的変化に拘わらず語としての同一性を保つ。

岩井（1993, p.223）は「単純な構造をもつ貨幣と商品との関係の分析は、それと比較にならないほど複雑な言語と事物との関係を考察するにさいして、なんらかの見通しをあたえてくれる」と述べる。我々の観点からもまた、言語と事物の関係は貨幣と商品との関係を、類比を通して、一つの特殊なケースとして含んでいると思える⁷⁾。

3. 言語と貨幣—ソシユールの比喩

ソシユールは言語をしばしば貨幣に喩える⁸⁾。共時言語学と通時言語学の区別に関連してソシユールは次のように言う。

経済学と経済史とは、同一科学の内部において、明確にわかれた二学科を構成する。さいきん現われた・これらの事がかんする書物は、この区別を強調している。このようなゆき方をするのは、そのわけをつまびらかにしなくとも、ある内部的必然に従っているのである：さてわれわれをして言語学を、それぞれ固有の原理をもつ二部門にわかたざるをえなくさせるものは、これとよく似た必然である。というのは、経済学におけると同様、ここでも、価値の概念に当面するからである；いずれの科学にあっても、秩序をことにする物のあいだの対当の体系が取り扱われる：かれにあつては労働と賃銀、これにあつては所記と能記。

（『一般言語学講義』 p.112-113. 引用に当たって下線は省略。）

ここでは、共時言語学が価値の体系を論じる経済学に相当することが主張されているが、両学がともに価値の体系であることを繋ぐ比喩として、所記と能記の関係が労働と（その対価としての）賃銀の関係になぞらえられている。賃銀は普通は貨幣で支払われるのであるから、この引用は言語を貨幣に喩える比喩の一つであるとして良いであろう⁹⁾。

次に見る引用でも、言語（語）が貨幣（5フラン貨など）に喩えられている。先に、我々は語／意味を商品／価値になぞらえた。そして、『資本論』の価値形態論に依拠して貨幣誕生の論理を追った。しかし、むしろ、ソシユールは言語（語）を貨幣に喩える。すると、ソシユールが言語を価値の体系として捉えるとき、その「価値」はマルクスの価値形態論における「価値」とは隔たりがあると予想される。はたしてどうか。丸山（1981）を手引きとして、ソシユールにおける言語と価値の関係について考えてみたい。

丸山（Ibid.）はソシユールの『講義』第Ⅱ編（共時言語学）第4章（言語価値）§2「概

念の角度からみた言語価値」の小林英夫訳の冒頭から数節を引用して検討を加えている。検討の対象は、翻訳上の疑問点と『講義』自体の疑問点とに大別されるが、後者は『講義』の原資料に基づいて検討される。

ソシユールは価値が存在するためには次の二つの要因が必要であるとする。

1. その価値の決定を要するものと交換しうるような一つの似ていないもの。
2. その価値が当面の問題であるものと比較しうるいくつかの似ているもの。

(Ibid., p.317)

そして、ソシユールは次のように言う。

かくして5フラン貨が値するところのものを決定するには、つぎのことを知らねばならない。1. それは、なにかべつ物、たとえば一定量のパンと交換できること。2. それは、おなじ体系にぞくする一つの似ている価値、たとえば1フラン貨と、あるいは他の体系にぞくする貨幣（1ドル、等）と比較することができること。同様にして、語もまたなにか似ていないもの、すなわち観念と交換することができ、その上、なにかおなじ性質のもの、すなわち他の語と比較することができる。それゆえその価値は、それがなにかしかの概念と「交換」されうること、いいかえればなにかしかの意義をもつこと、を認証しただけでは、決まるものではない。さらにそれを似ている価値と、それと対立するような他の語と、比較しなくてはならない。(丸山 p.317-318)

丸山は波線部分を疑問として検討を加え、およそ次のように論じている。

『講義』の原資料は語の交換対象として「観念」とか「概念」を持ち出してはならず、ここでの交換可能なものは聴覚映像と意義であり、しかもここで用いられている「意義」は、「ある語の価値は、共存するいくつかの辞項の協力によってしか決定されないであろう。その語の境界を画定するのは、他の語群の共存なのである」と語られるところの「価値」に非常に近い概念である。(Ibid., p.323 要旨)

この結論は次の原資料を一つの根拠としている。

同様に、ある語の意義は、交換可能なものだけを考慮に入れている限り、なかなか決定することはできないだろう。それと比較し得るいくつかの語の、同じような系列に目を向けなければならない。(Ibid., p.322)

ここで私は二つの点に着目したい。第一点は、語が貨幣（5フラン貨、1フラン貨、1ドル

貨幣)に喩えられるに当たり、それらが端的に「価値」と呼ばれていることである。語は一定量のパンに喩えられる「意義」を持つが、丸山の指摘に拠ればこの「意義」は「価値」とほとんど同一であると考えられる。すると、5フラン貨も、その交換対象であるパンもともに「価値」ということになる。ソシユールにとって、「交換」の比喩は能記(シニフィアン)と所記(シニフィエ)の表裏一体性を含意していると思える。

第二点は、語の意義、言い換えれば、語の価値は、5フラン貨が1フラン貨と(同じ体系の中で)比較できるように、同様に、他の語と比較されることによって決まるということである。ソシユールにとって「価値」は、「一辞項の価値は他のものの同時的現前からのみ生じる」ところの「価値」なのである(小林英夫訳『講義』、丸山 p.316)。

この第二の点をさらに考えてみたい。5フラン貨が一定量のパンと交換できるということは、一定量のパンの価格が5フランということである。ソシユールが語について他の語と比較すべしと述べていることを貨幣に当てはめるならば、パンの価格が5フランということは、例えばチーズの一定量の価格が1フランであることと比較すべし、ということであろう。そして、「比較すべし」とは実のところ、パンの価格はチーズの価格と無関係には決まらないということであろう。

岩井(Ibid., p.28)は、言語を「純粋な価値の体系」として捉えるソシユール言語学の背景には、経済学からの影響、特にワルラス(1834-1910)の一般均衡理論の影響があったとするピアジェ(『構造主義』クセジュ文庫)の指摘に触れている。岩井によれば、ワルラスは「すべての市場の需要と供給を同時に均衡させる価値体系(一般均衡価格体系)の存在を数学的に証明した」のであり、「ここに価値体系の科学としての経済学が形式的な完成をみた」とされる¹⁰⁾。

論文「交換の数学的理論の原理」(『社会的富の数学的理論』所収 p.13)では、ワルラスは「実際面では単純化となる貨幣の導入が、理論面では複雑化となるので、しばらく退けられねばならないことは、明らかである。それゆえに、小麦の燕麦に対する直接的な交換に立ち戻って」と述べた上で市場均衡価格を論じている(ここで言う「価格」とは、「燕麦で表された小麦の価格」などの意味である)。まず2商品間の交換が取り上げられ、続いて多数(m個)商品相互間の交換が論じられる。そして、後者における均衡価格(一般均衡価格)は、第m番目で表された(m-1)個の商品の価格として実現されるが、このm番目の商品が「価値尺度財」と呼ばれる。(A, B, Cの3商品間の交換の場合でいえば、Aで表されたBの価格と、Aで表されたCの価格とから、Bで表されたCの価格が計算できるが、それがBとCの交換から決まるところの、Bで表されたCの価格と一致する場合が「均衡」である。この場合Aが「価値尺度財」である。)価値尺度財が同時に現実の交換の媒介機能を果たせば、それは貨幣ということになるが、価値尺度財が直ちに貨幣であるとは言えないであろう。マルクスの価値形態論で言えば、ワルラスの「価値尺度財」は第三形態の右辺商品あるいは第二形態の左辺商品に相当すると思える¹¹⁾。

ワルラスは『純粹経済学要論』第十四章「等価値配分の定理。価値測定的手段と交換の媒介物について」で次のように述べる。

一般均衡の状態における市場において、小麦の一ヘクトリットルが常に九〇%品位の銀の二四半デカグラム（一二〇グラム）と交換せられるという事実は、方程式

$$p_{b,a} = 24$$

によって表される。これは次のようにいい表すことができる。「銀で表わした小麦の価格は二四である。」また、もし量の単位を表わそうとすれば「小麦の一ヘクトリットルの価格は九〇%品位の銀の二四半デカグラムである」、または、「小麦は一ヘクトリットルで九〇%品位の銀の二四半デカグラムの価値がある」と。(Ibid., p.164)

(引用の $p_{b,a}$ は商品Aで表わした商品Bの価格を意味する記号である。)

これらの表現は、「実際の慣習から借りた表わし方」であるところの「小麦は一ヘクトリットルにつき二四フランの価値がある」と異なっている、そして「この差異は注意深く議論する必要がある」とワルラスは言う。まず、ワルラスは「通常の人々」の「フラン」に対する理解を次のように説明する。

この体系において、(A)は銀であり、九〇%品位の銀の半デカグラムが銀の量であり、(B)は小麦であり、ヘクトリットルが小麦の量の単位であるから、次の方程式を立てることができると思われている。

$$v_a = 1 \text{ フラン}$$

そしてこの場合、市場において小麦の一ヘクトリットルが常に九〇%品位の銀の二四半デカグラムに交換せられるという事実を、方程式

$$v_b = 24 \text{ フラン}$$

で表わし、これを「小麦は一ヘクトリットルにつき二四フランの価値がある」といい表わすと信ぜられている。(Ibid., p.166. 下線は引用者)

ここで、 v_a および v_b はそれぞれ商品AおよびBの「交換価値」を表わす記号であり、第5章「市場と競争。二商品の間の交換の問題」において次のようにして導入される。

一人の仲買人が、たとえば前回の市場の引値に従って (A)の m 単位に対して (B)の n 単位を与えることを申出たと想定しよう。この場合の交換方程式は次の通りである。

$$mv_a = nv_b$$

v_a を (A)の一単位の交換価値と呼び、 v_b を (B)の一単位の交換価値と呼ぶ。(Ibid., p.48)

従って、「通常の人々」は、九〇%品位の銀の半デカグラムは1フランの（交換）価値があ

り、また小麦の一ヘクトリットルは24フランの（交換）価値があると考えていることになる。ところが、ワルラスは次のように述べて、「フラン」の実在性を否定する。

……与えられた場所と時において、与えられた価値たとえば一ヘクトリットルの小麦の価値を（引用者補足：長さや重さなどと）同様に測り得るためには、価値にも三つの事柄がなければならない。小麦の一ヘクトリットルの価値、九〇%品位の銀の半デカグラムの価値、第一の価値と第二の価値との比すなわちその尺度、である。ところで、これら三つの事柄のうち、第一と第二の二つは存在せず、第三だけが存在する。われわれの分析はこのことを完全に証明している。すなわち、価値は本質的に相対的なものである。もちろん、相対的価値の背後には絶対的なあるもの、すなわち充たされる最終の欲望の強度すなわち希少性がある。しかし、希少性は絶対的であって相対的ではないが、主観的または個人的であって、現実的でも客観的でもない。それはわれわれのうちにあり、事物のうちにあるものではない。それゆえ、これを交換価値に置き換えることはできない。そこで、結論としていえることは、希少性というものも九〇%品位の銀の半デカグラムの価値も実在せず、フランという語は実在しないものの名称である、ということである。

（Ibid., p.166-167. 下線は引用者）

二つの物の長さを比較する場合、それぞれの物は長さを持つと考えられており、その上で比較される。一メートルの長さの棒と二メートルの長さの棒は、それぞれの長さが存在した上で、それらの比が計算される。一方、商品の場合、それぞれの商品に内在するかのように考えられる交換価値はそれぞれ単独では存在せず、交換の量的比率のみが（価格として）存在する。ワルラスは先に引いた第5章の引用に続けて次のように書く。

交換価値の比すなわち相対的交換価値を一般に価格と呼び、(A) で表わした (B) の価格、(B) で表わした (A) の価格を、それぞれ一般に p_b, p_a で表わし、この場合の比 m/n および n/m の値をそれぞれ μ および $1/\mu$ で表わせば、上の方程式（引用者注： $mv_a = nv_b$ ）から

$$v_b/v_a = p_b = m/n = \mu$$

$$v_a/v_b = p_a = n/m = 1/\mu$$

が得られ、……

（Ibid., p.48-49）

ワルラスは不思議な算術を実行しているように思う。各商品の交換価値があたかもそれぞれ存在するかのように設定しておいて、しかし実際にはその比、すなわち価格のみが定まる。実際の所、この価格は交換価値から定まるのではなく、交換比率からである¹²⁾。

ソシュールがワルラスの「フランという語は実在しないものの名称である」という命題をど

のように認識したであろうかは分からない。いずれにせよ、均衡理論の影響を受けたと言われるソシュールによるフラン貨幣の比喩は「注意深く論議する必要がある」と思われる。

先に見たように、ソシュールは5フラン貨を価値そのものと見ていると思われる。その点ではワルラスの言う「通常の人々」と同じ捉え方をしているようにも思える。しかし、重要なことは、ソシュールは比喩を通して、パンの価格が5フランであることが他の商品の価格と無関係には決まらないという事実を述べていることであろう。一商品の（価値尺度財による）価格は他の諸商品の価格との均衡の上に成り立つ。つまり、一商品の価格の変動は他商品の価格に波及する¹³⁾。同様に語の価値は他の諸語の価値との均衡の上に成り立つ¹⁴⁾。

ソシュールがワルラスの「均衡」する「体系」というアイデアに刺激されたとするならば、その体系は均衡価格による多数商品相互間の交換による価値体系であると考えられる。ただし、そこには価値尺度財は存在しても、交換の媒介機能を果たす貨幣は必ずしも存在しない。まして、「5フランの価値」という言い回しが要注意であるとする、ソシュールの語る5フラン貨は貨幣の地位から価値尺度財（銀の一定量）に引き戻されるべきものとも考えられる。そして価値尺度財はあくまで商品である。従って、ソシュールはここでは語を商品に喩えることができたはずであると思う。すると、ソシュールの語る（貨幣と商品の）「交換」の比喩は、極小の価値表現、すなわちマルクスの商品と商品の交換における価値表現（第一形態）と捉えることができるのではないか。つまり、語の「意義」（＝「価値」）の他の語による「表現」についての比喩に読み替えることが可能ではないであろうか¹⁵⁾。

4. 語の同一性

我々は貨幣を、類比的には、外延を共有しない二語から成る語群の集合が集約されるに際して同一性を保持する語と見た。では、語の「同一性」はどのようにして成り立つか。貨幣とのアナロジーを離れて、語群一般に沿って考える。

語の意味（*artha*）を語群において定めるとして、一般的には外延の変動などにより語群は変化する。そのとき、語Xの*artha*が（当初の語群 ω_1 における） α から（変化後の語群 ω_2 における） β へ変化した、と言うためには両語群においてXは「同じ」語でなければならないであろう。以下で我々は「同一性」の根拠を語の内包に求める場合と、外延に求める場合とに分ける。そして、それぞれについて、語の音声と同じ場合と、異なる場合とに分ける。

まず、語の内包的意味が変わらず、かつ語の音声（音韻）が不変ならば、語は両語群を通じて同一であることは問題ないであろう。では、内包的意味が変わらず、しかし音声に変化する場合はどうであろうか。この場合に関して、我々は言語音の変遷について述べる時枝誠記の次の言を手がかりとしたい。

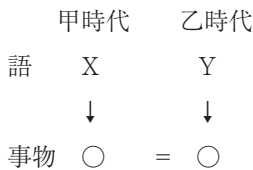
歴史的変遷は、主体を媒介とする処の個物と個物との制約連関から成立している。言語音の変遷も亦同様である。例えば、「ここだ」「ここら」の二語をとって見る。甲時代に於け

る主体一般は“da”と発音していた。乙時代になると、調音部位が次第に後退した結果“ra”と発音されるようになった。この二語は同一事物を表す同一語であるものが、単に音声行為の移動によって異った語の様になったものであるから、これを同一語の音の変遷と認めることが出来る。dがrに変わらずということは、黒色が次第に褪せて鼠色になる様なものではなく、甲乙両時代に於ける言語主体の発音行為の移動に基くものである。

時枝誠記『国語学原論』岩波1983（初版1941） p.150-151.（下線は引用者。なお、引用に当たり現代仮名遣いに改めた。）

（古語辞典によれば、「ここだ」「ここら」は程度・量について、はなはだしいさまを表す副詞であり、前者は上代語、後者は中古以降の語である。）

甲時代における語Xと、乙時代における語Yが「同一語」であるためには、語Xと語Yの音声¹が同一であることは必ずしも必要ではない。「同一語」の音声（音韻）が変化し得る。時枝は上の引用で「この二語は同一事物を表す同一語である」云々と述べている。これを図で表せば次の如くであろう。



図から明らかなように、語の同一性は事物の同一性を媒介にして得られる。「ここだ」「ここら」の場合、“事物”は内包的意味と言えるであろう。その同一性を介して「ここだ」と「ここら」が語として同一性を有すると考えられる。上で時枝は「この二語は … 同一語である」と述べている。ここで「二語」は音声（音韻）の異なり（「ここだ」と「ここら」）を意味しているのに対し、「同一」は“事物”の同一性に基づく。音声上は異なる二語が、語が表す“事物”（内包的意味）の同一性に拠って「同一」と見なされる。

一般に、同一の義（意味）を表す異なる音声としての語は同義語と呼ばれる。しかし、上の「ここだ」「ここら」の場合、内包的意味の同一性に拠る同義語関係は実のところは「同一語の音の変遷」である。「ここだ」は上代語、「ここら」は中古以降の語だからである。

ソシュールは、〈熱い〉を意味するラテン語calidumからフランス語chaudへの変遷について、「calidum と chaudのように大いにことなる二語の通時論的同一性とは、たんに、言（引用者注：パロール）のなかで一連の共時論的同一性をつぎつぎと通ってきながら、それらをむすぶ紐帯があいつぐ音韻変容によっていちども中断されなかったことを、意味するにすぎない」（『一般言語学講義』p.253）と述べるが、これをJ.カラーは次のように説明している。

或る時点において calidum と calidu が相互交換可能で、共時的に同定的であった、次に calidu と cald が、次に cald と tfalt が、次に tfalt と tfaut が、次に tfaut と faut が、次に faut と fot が、最後に fot と fo (chaud の発音) とが、相互交換可能で共時的に同定的であった。或る語の転換について語り、通時的な同定性を要請するとき、われわれは事實は、次々に重なった一連の共時的同定体のことを要約して言っているのである。

(Ibid., p.53-54. 下線は引用者)

「相互交換可能で共時的に同定的」(カラー) な二語は、我々の「同義語」に相当するであろう。すると、calidum から chaud への音韻変化は同義語の鎖から成り立つと言える。例えば、calidum と calidu は「相互交換可能で共時的に同定的」であった。我々はこのような場合、同義語性が「経験された」と言おう¹⁶⁾。一方、calidum と chaud が共に使用される時点¹⁷⁾ は存在しない。従って、calidum と chaud の同義語性は(言語共同体によって)「経験されない」と言えるであろう。「ここだ」「ここら」の場合、その同義語性は「経験された」と考えられる。

次に「同一性」の根拠を外延に求める場合を考える。いま、語 X の外延を $M(X)$ で表わす。語 X の音声(音韻)を a とするとき、順序対 $(a, M(X))$ を考える。同様に語 Y について、 $(b, M(Y))$ を考える(これは語 Y の音声 b であることを意味する)。このとき、語の同一性を順序対の同一性によって定義すれば、語 X と語 Y が同一であるのは、 $a = b$ かつ $M(X) = M(Y)$ のとき、そしてそのときのみということになる。

語のこの同一性は、しかし、外延がわずかでも変動すれば成り立たなくなる。そこで、 $a = b$ かつ $M(X) \sim M(Y)$ であるとき、そしてそのときに限って語 X と語 Y が同一であると定義することが考えられる。ここで、 $M(X) \sim M(Y)$ は、 $M(X)$ の任意の要素と $M(Y)$ の任意の要素が互いに質的に同一であることを意味するものとする¹⁸⁾。例えば、語群 ω_1 における「うし」は語群 ω_2 における「うし」と、外延は変動してもそれら外延が牛から成り立つ限り、同一の語である。語のこの同一性は、同一の音声の(数的には)二つの語を、外延の要素同士の質的同一性に基づいて、(数的に)同一と見なすことによって得られる同一性である。

ここで一つの問題が考えられる。 $M(X) \sim M(Y)$ のとき、当該の質的同一性を保証するところの「性質」あるいは「基準」を、語 X および Y は内包的意味として持つであろうか、という問題である。同一音声の語 X と語 Y が同一の内包的意味を持ち、またその内包的意味が外延を決定するならば、 $M(X) = M(Y)$ の場合も含めて、X と Y は $M(X) \sim M(Y)$ によって同一であると言える。しかし、 $M(X) \sim M(Y)$ は必ずしも X と Y が(同一の)内包的意味を持つことを必要としないであろう。例えば、この牛とあの牛に共通する性質を表わす内包的意味を語「うし」は持つと言えるであろうか。自然種名を巡る Kripke の議論はこれへの有力な論駁であると思える¹⁹⁾。

我々はこの問題に立ち入ることは避けて、いまは、音声が同一 ($a = b$) の場合、 $M(X) \sim$

M(Y) によって語XとYの同一性を定義することにする。

語Xと語Yの音声異なる場合。M(X)～M(Y) によって言えることは一般にXとYの同義語性であって、同一性ではないであろう。例えば、「なる」と「地震」は同義語と考えることができようが、同一語であるとは言えないであろう（「地震」はおそらく外来語であろう）。音声異なる場合、語Xと語Yが同一であると言えるためには、嘗ての語Xが今の語Yへと音声変化した、といったことがなければならないと思える。そうでなければ、XとYは同義語にすぎないであろう。

ここで時枝の図に戻って、“事物”が外延の場合を考える。つまり、外延の同一性を媒介することによる語の同一性について考える。ソシュールはラテン語のmare〈海〉がフランス語のmer〈海〉になった事実を挙げるが（『一般言語学講義』p.253）、J.カラーは次のように説明する。

事実、mareとmerとを連結することにおいてわれわれが想像していることは、次のことである。すなわち、mareとmerとその中間の形式が共時的な同定体の不断の連鎖を構成している、ということである。〔中略〕それらの形式は、もちろん、相異なる連想（例えば一方の形式はいささか旧式と思われたかもしれない）を伴ってもいようが、話し手によって互いに交換して用いられ得たのである。〔中略〕一方から他方の形式へ動き移ることは現実の意味に相違を産み出さないから、言語体系の観点からは、二つの形式のあいだに共時的同定性がある。（J.カラー、和訳p.53.下線は引用者）

ここでも、下線部が示すように、同義語性の経験が想定されている。我々はいま、「馬」について、その音の変遷（「むま」→「うま」）を考えてみたい。

甲時代には「むま」であった語が乙時代には「うま」になったとする（「むま」と「うま」の中間形は存在しなかったと仮定する）。「むま」から「うま」への変化はある日突然起きた変化ではないであろう。いま、一つの地理的空間（地域U）を限定する。甲時代はUの全域で「むま」が使用されているものとする。そして、ある時点から「うま」が使われ始めたとする。

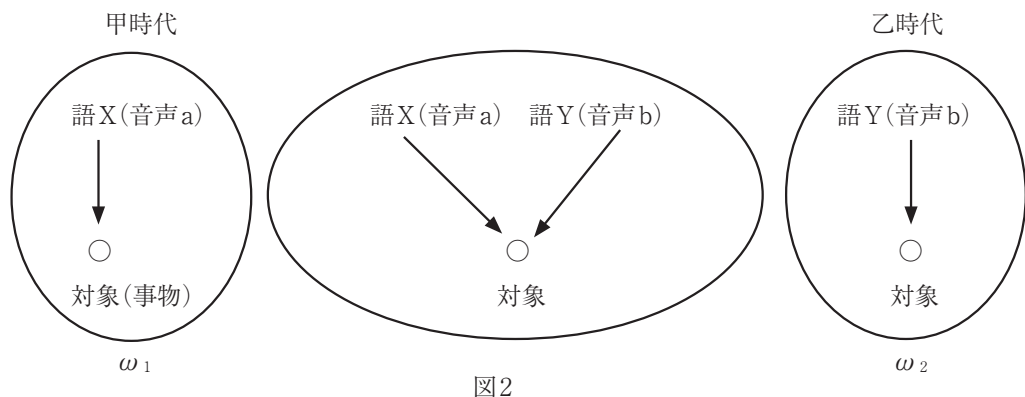
ここで、二つのケースが考えられる²⁰⁾。第一のケースはUの全域で「うま」が「むま」の同義語として使用される場合である。初め「うま」の使用頻度は低いであろうが、やがて頻度が増し、逆に「むま」の使用が低頻度になり、乙時代に至って、「うま」のみが使用されるに至る。

第二のケースは、Uの一部分Aで「うま」が使用され始めるが、残りの地域（U-A）では依然として「むま」が使用されている場合である。この場合は、「むま」と「うま」の同義語性は部分域Aでのみ成り立つことになる。やがて、残りの地域（U-A）の中の部分域Bにおいて「うま」が使われだし、従って、Bにおいて「むま」と「うま」の同義語性が成り立つこ

とになる。(この時点で、Aにおいては「むま」は使用されずに、「うま」が専ら使用されていることもあり得る。)このようにして、「むま」と「うま」の同義語性が部分域を次々と通り抜けて行き、最終的に乙時代には全域的に「うま」のみが使用されるに至る。

第二のケースにおいて、「むま」と「うま」の同義語性はUの部分域でのみ成立するのであるが、甲時代と乙時代の間にもどの部分域もこの同義語性を経験するのであるから、乙時代にはUの全域がこの同義語性を経験したことになる。

一般的に表すなら、地理的空間(地域)を限定した上で次のように言えるであろう。甲時代(語群 ω_1)の語Xはある時期から、音声aと音声bが(全域的あるいは局所的に)同義語的に使用され出す。このとき、音声bを以て使用される語を語Yと名づける。乙時代(語群 ω_2)に至り、語X(音声a)は使用されず、専ら語Y(音声b)が使用される。この音声の変遷は次の図2のように表せるであろう。(上に見たように同義語性の経験のあり方には二通りが考えられるが、図ではその区別はしない。)



つまり、甲時代には語Xのみが使用されていたが、やがて(全域的あるいは局所的に)語Yが語Xの同義語として使用され始め、さらに乙時代に至り、語Yが専ら使用される。

ここで、語Xと語Yの同一性の根拠となるものは、外延、従って対象(事物)の同一性であると言える。しかし、甲時代の対象と数的に同一の対象が乙時代にも存在しているとは限らない。「馬」の場合、もし甲時代と乙時代の間にも100年以上の隔たりがあるとすれば、甲時代に「むま」が適用される或る一頭の馬が、乙時代に「うま」が適用される一頭の馬そのものであることは不可能である。それにも拘わらず、甲時代の「むま」と乙時代の「うま」が同一の語である、あるいは語「馬」の音声は「むま」から「うま」に変化した、とすることができるのは何故であろうか。

これを可能にしているのは、図2における語Xと語Yの同義語関係であるように思う。すなわち、語Yは語Xと同義語の関係に入ることによって、いわばXから(数的に)同一の外延—それは質的に同一の対象から成る—を受け継ぐ。つまり、甲時代から乙時代にかけて、語X

(音声 a = 「むま」) と語 Y (音声 b = 「うま」) が同義語であることが全域的に (同時的に、あるいは経時的に) 経験されるということが、音声 a と音声 b を同一語たらしめると考えられる。乙時代 (語群 ω_2) の語 Y が甲時代 (語群 ω_1) の語 X と「同一」であるためには語 Y が語 X の同義語であることを (言語共同体が) 全域的に経験することが必要と考えられる。同義語性の経験は音韻変化が同一語の音韻の変遷であるための必要条件であろう。

駒を持ち出すならば、リレー競争が考えられる。赤チームの (第一走者は除く) 走者は赤いバトン を直前の走者から受け継いで走る。バトンを受け継ぐ瞬間、二人の走者は同じバトンに触れていなければならない。語「馬」を赤チームに、音声「むま」と「うま」を走者に、外延をバトンに喩えたい。二人の走者がバトンを共有することが同義語性の経験に相当する。チームの勝利はバトンの受け渡しの成功にかかっている。(同義語性の経験があれば必ず同一語であるとは限らない。例えば、「なる」と「地震」は同義語と考えることができようが、この場合は「なる」が「地震」に音韻変化したのではなく、初めから別語であったと考えられる。)

生成消滅する事物の世界で、語はこのような同義語的状況を繰り返しながら、その音声を変化させていく。図2では対象として馬などの個体が想定されているが、肝腎なことはこの個体は生成消滅する存在であるということである。一頭の「むま」が滅しても、別の馬 (たち) が「むま」と「うま」の同義語性の根拠として存在しているならば、同義語の連鎖は途絶えない。ここで言う同義語性とは、「むま」と「うま」が同一の個体に適用できるということであり、結局のところ、「むま」と「うま」の外延が等しい (同延) という他にない (なお、この「同義」を我々が定義した artha すなわちアポーハ論的な意味における「同義」(同一の artha を有する) と読み替えることが可能である²¹⁾。

このようにして、語 X はその音声を a (「むま」) から b (「うま」) へ変化させながら、かつ変動する外延を有しつつ、同一の語であり続ける。

上の議論で、語群 ω_1 から ω_2 への移り行きにおいて語 X の外延は無くならないと仮定した。言い換えれば常に質的に同一な対象が存在すると仮定した。では、ある時点で質的に同一な対象が存在しなくなった、すなわち語 X の対象が“全滅”したとすればどうであろうか。幾つの場合に分けて考えてみたい。

1) X が生物などの自然種名であるとき。この場合は、「ニホンオオカミ」のように、過去の時点でのみその外延を持つ語になるであろう。従って、もはや外延が変動しない語になる。

2) X が「筒玉 (つつだま)」 (= 「弾丸」) のような人工物の名前であるとき。この場合は、いったん筒玉がこの世に存在しない (“全滅”した) 時点が存在したとしても、再び「筒玉」は存在することができたであろう (従って“絶滅”ではない)。なぜなら、筒玉の設計図 (デザイン、形相) は人間の側にあるからである。それは「筒玉」が内包的意味を持つことでもある。その内包から決まる「筒玉」の外延は空間的にも時間的にも“飛び飛び”であり得た (実際には、「筒玉」はやがて「弾丸」に取って代わられたが)。

3) Xが自然現象の名である場合。“飛び飛び”に存在するものが常に人工物であるわけではない。多くの自然現象は“飛び飛び”に存在する。例えば、「なる」。これは内包的意味を有し、またその内包的意味が変化し得る²²⁾。

語の音韻変化があったとして、1) は外延が変動しないことによる語の同一性が、また2) と3) は内包的意味による語の同一性が考えられる。(なお、calidum → calidu → cald → tʃalt → tʃaut → ʃaut → ʃot → ʃo (chaud) という変化も、これを〈熱い〉という“現象”の名の音韻変化と見ることもできるであろう。)

おわりに

日常は生成消滅する事物に取り巻かれている。従って、それらの事物を言い表す日常の語彙もそれらの変化に対応すべく宿命づけられている。しかし人間の言語は個々の事物の生成消滅をそのまま反映させる仕組みにはなっていないようである。或る個物や現象が消滅しても、同種と見なされる別のそれらが存在すれば、消滅した個物や現象に対すると同じ語を以てそれらを言い表すことができる。その意味で言語は横着である。横着な余り事物を一般化し、さらにそれらを実在視すらすることもある(普遍実在論)。

このような横着と実在視が通用する世界があるかも知れない。数の世界がそのように見える。生成と消滅の彼方に、しかし、強烈な実在性の光を放って数は存在しているのであろう。現代論理学はそのような数の世界を対象として作られてきたと言える。「外延」もまたその影響を免れない。自然言語への数理論理的アプローチに批判的なG.レイコフ(Lakoff, 和訳 p.220)が指摘するように、「素数」など数学上の概念の外延は時間や状況によっては変化しないと仮定されている。

アポーハ論には「素数」も「偶数」も現れない。現れるのは「牛」であり「蓮華」である。従って、語の意味は「他の排除」であるというアポーハ論の基本命題の理解は、素数や偶数ではなく牛や蓮華のあり方、すなわち生成消滅する対象のあり方に沿って行われなくてはならないであろう。つまり、数学と異なり、語の意味を直ちに不動の外延に求めることはできない。

我々は語の意味(artha)を当該の語の外延そのものとしてではなく、語群中の他の諸語の外延との関連の中で求め定めた。語Pの意味(artha)は、語群において、他の語(の集合)として表される。ここには、商品の価値(交換価値)が他の商品(使用価値)として表われるという『資本論』価値形態論の基本的原理と似た在り方が語について見られる。そして、貨幣とは、類比的には、特殊なタイプの語群の集まりが時間軸に沿って集約的变化を遂げるとき、その変化を通して同一性を保つ語の謂いである。

語とその意味(artha)をそれぞれ「能記」および「所記」と呼べば、能記Pの所記arthaはP単独では定まらず、P以外の諸語(能記)との関連に置かれて定まる。語Pの意味(artha)

は語Pのみからは取り出せない。他の諸語の関与が必要である。この点において、我々のアポーハ論解釈はソシユールの言語論との接点を有すると思える。

しかし、一見ソシユールの見える語／意味 (artha) の (能記／所記の) 関係はソシユールが批判する言語名称目録観の上に構成される言語価値論である。なぜなら、語の意味 (artha) は語群に基づいて求められるが、本稿において語群そのものは語とその適用対象 (外延) が截断されているからである²³⁾。

丸山によれば、ソシユールは次のように述べて名称目録観を否定する。

……アダムはさまざまな動物を傍らに呼んで、それぞれに名前をつけたという。……コトバの根柢は名前によって構成されてはいない。……それにもかかわらず、[哲学者の考えには] コトバが究極的にかなるものかを見る上で、我々が看過することも黙認することも出来ないある傾向の考え方が、暗黙のうちに存在する。それは事物の名称目録という考え方である。

それによれば、まず事物があって、それから記号 (シーニュ) ということになる。したがって、これは我々が常に否定することであるが、記号に与えられる外的な基盤があることになり、コトバは次のような関係によって表わされるだろう。

$$\text{事物} \left\{ \begin{array}{l} * - c \\ * - b \\ * - a \end{array} \right\} \text{名称}$$

ところが、真の図式は、 $a - b - c$ なのであって、これは事物に基づく $* - a$ といったような実際の関係のすべての認識の外にあるのだ。(ソシユール手稿、丸山 1981、p.117 所引)

……語が他の語 (パラセーム) に取り囲まれていることを忘れて、語とその意味を語ることができると思っている間は、言語現象について何らかのイメージをもてると考えたら間違いである。(do.)

これらソシユールの言を受けて、丸山は次のように述べる。

指向とは、コトバによる言語外世界の一つの解釈であり、差異化である。一般的に、言語記号は言語外現実を指し示しているように思われるが、その指し示している指向対象は、コトバによって創り出された現実である。記号の発生と記号の指向作用は二つの異なったレベルであって、コトバは現実を切り取った後にはじめてこれを指向する。したがっ

て、指向機能は、言語によって構成された一文化の観念形成の内部で見られた世界の網状組織を経由してから、現実の対象物へと働きかける。(Ibid., p.123)

我々のアポーハ論的意味(artha)の構成は語群を出発点とする。対象への語(名前)の適用(vṛtti)が適正か否かが判明していることから出発する。いま、この「適用」を「命名(saṅketa)」と「使用(vyavahāra)」とに分けて考える。誕生した子供への固有名による命名や、新種発見による種名による命名など、現前する個体に対しての命名がある。これらの命名そのものには適否は考えられない(プラトンの意見は聞かないでおく)。一方、これらの名前が言語共同体に受け入れられれば、その後その語の使用には可否が問われる。「太郎」のその弟次郎に対する使用や、「牛」の馬への使用は通常は適正とは認められない。

従って、語群の設定に当たり、本稿で用いた「適用」は、その可否が問える限り、ここで言う「使用」の意味でなければならない。すると、語群において対象として配置された一つ一つはすべて既に命名されていなければならない(とは言え、その命名に用いられた名前は必ずしも語群に現れる語である必要はない。一群の牛を対象とする語群に「牛」が登場する必然性はない)。

他方、対象への語(名前)の「適用(vṛtti)」が「命名」であるとき、語群における語の「適用」の可と否は、それぞれ、対象が命名の対象であるか否かに読み替える必要があるであろう。この読替によって、我々の言語価値論は命名の場面に遡ることが可能になる²⁴⁾。

丸山はヘレン・ケラーが“water”を修得する場面について次のように述べている。

それまで感覚=運動的に知覚していた水が、突然別の網の目に区切られて、^{レフエラン}記号の指向対象としての水となりました。[中略] 最初の一語を覚えてからヘレン・ケラーの場合は一挙にコトバの世界が開けたと言われていますが、実は、最初の一語と言われているwaterは、実体的な一語の修得ではなく、waterとnon-waterという対立構造把握の出発点であったのです。(丸山 1983、p.48)

「waterとnon-waterという対立構造」を一般的にディグナーガは「語の意味は他の排除である」と表現したと言えるように思う。我々のアポーハ論的言語価値論の観点からは、命名とは新たな語とその外延の導入であり、従って、語の価値の再編成・再布置を引き起こす。その意味で、命名はラングに働きかける一つのパロールであると思える。アポーハ論的意味(artha)を定める為に設定される「語群」は、原理的にはこの命名の現場あるいはその社会的受容(承認)の時点にまで遡ることができるであろう。

【略号・参考文献】

- PS (『集量論』)=Pramāṇasamuccaya: Ole H. Pind, *Dignāga's Philosophy of Language, Dignāga on anyāpoha*, Wien, 2009.
- Kripke, S.A. *Naming and Necessity*, Harvard University Press, 1980(1972).
(和訳: 八木沢・野家訳『名指しと必然性』産業図書1985.)
- Lakoff, G. *Women, Fire, and Dangerous Things*, The University of Chicago Press, 1987.
(和訳: 池上嘉彦・河上誓昨他訳『認知意味論』紀伊國屋書店1993.)
- Trier, J. *Ueber Wort- und Begriffsfelder* [「語の野」と「概念の野」について] 福本・寺川編訳『現代ドイツ意味理論の源流』大修館 1975 所収
- 岩井克人 1993. 『貨幣論』筑摩書房
- 上田 昇 2016a. 「アポーハ論と名辞—否定名辞・複合語」『印度学仏教学研究』第64巻第2号
- 上田 昇 2016b. 「オイラー図とアポーハ代数」『目白大学人文学研究』第12号
- カラー, J. 1976. 『ソシュール』(川本茂雄訳) 岩波 1992. (Jonathan Culler. SAUSSURE. London, 1976)
- ソシュール, F. 1931(3rd. ed.) (初版1916) *Cours de linguistique générale*.
(和訳: 小林英夫『言語学原論』改訳新版 岩波1941; 『一般言語学講義』改版 岩波1972)
- 月本雅幸 2015. 『日本語概説』(放送大学教材)放送大学教育振興会
- 根岸隆 1985 『ワルラス経済学入門—純粋経済学入門』岩波
- マルクス, K. 1890 (4th. ed. エンゲルス校訂). (初版1867) *Das Kapital* (和訳: 向坂逸郎『資本論』第一巻 岩波1967)
- ピアジェ, J. 1968. 『構造主義』(滝沢武久・佐々木明訳) 白水社 1970
- 丸山圭三郎 1981. 『ソシュールの思想』 岩波
- 丸山圭三郎 1983. 『ソシュールを読む』 岩波
- 丸山圭三郎 1985. 『ソシュール小事典』 大修館
- 森嶋通夫 2004 『森嶋通夫著作集9 ワルラスの経済学』(西村和雄訳)岩波 (*WALRAS' ECONOMICS: A Pure Theory of Capital and Money*, 1977)
- ルベイロ, A. 2006 『ワルラスの経済思想』慶應義塾大学出版会(Antoine Rebeyrol, *La Pensée Economique de Walras*, Dunod, 1999)
- ワルラス, L. 1984 『社会的富の数学的理論』(柏崎利之輔訳)日本経済評論社. (Marie Esprit Léon Walras, *Théorie Mathématique de la Richesse Sociale*, Lausanne: Duncker & Humblot, 1883)
- ワルラス, L. 1926. (初版1874) *Éléments d'économie politique pure ou Théorie de la richesse sociale*, Paris et. Lausanne. (和訳: 久武雅夫『純粋経済学要論』岩波1983)

【注】

- 1) この基本命題について少なくとも二つの但し書きが必要であろう。一つは、“śabda”は必ずしも「語」とは限らないということである。普遍 (sāmānya) としてアポーハは音声の問題となる場合 (śabda-sāmānya) と、語 (の意味) が問題となる場合 (artha-sāmānya) に分けられている。また、後者の場合でも一語の意味 (artha) ばかりでなく、複合語や、句・文も視野に入っている (注釈者 Jinendrabuddhi は語の分解〈語幹+格語尾〉も議論に含める)。今ひとつは「排除 (apoha)」には排除作用の意味もあるということである。実際、PS 5章k.25は語の働きとして「排除 (-nud)」を (それを否定する形で) 述べている。(例えば「歌う」という働き(作用)は、その結果たる「歌」と密接不可分であるように、「排除」についても作用と結果は不可分と思える。) なお、二語の関係について、一方の語が他方の語 (の artha) を「排除する」とか「排除しない」といったことをダイグナーが語る場面で「排除」の原語は apoha, -nud, nivṛtti, vyavaccheda, vyudāsa など多様であるが、考慮しなければならない意味上の大きな差異は無いと思える。

- 2) 命題論理学における論理式。ただし含意記号を含まないものに限定する。従って、語としての論理式に現れる論理記号は、選言(\vee)、連言(\wedge)、否定(non)である。
- 3) 拙論(2016a)では論理式Pのarthaとして、本稿における定義の他に、対象領域における補集合操作を避けた定義を挙げ、それを基本的としたが、今は分かりやすさを優先させた定義を採る。
- 4) オイラー図はそもそもオイラー(1707-1783)が三段論法の各命題を表わすために用いた二つの円による四種類(全称肯定、全称否定、特称肯定、特称否定)の図のことであるが、拙論では語の外延上の関係を同一平面上で示す3個以上の円(凸閉曲線)による図も含めてオイラー図と呼ぶ。詳細は上田2016b。
- 5) マルクスは商品の貨幣形態が単純なる価値形態(第一形態)の発展した姿にすぎないことを発見した最初の探求者はアリストテレスであると述べる。しかしまた、価値表現(しとね5個=家1軒)における等一関係の発見にも拘わらずアリストテレスの天才は、彼の生活していた社会(奴隷労働にもとづく)の歴史的限界によって、等一関係の真の在処を見いだすことを妨げられたのである、とも述べている。マルクスによれば、「価値表現の秘密、すなわち一切の労働が等しく、また等しいと置かれるということは、一切の労働が人間労働一般であるから、そしてまたそうあるかぎりにおいてのみ、言える」からである。(p.78-79) 我々のアナロジーは言語における「労働」の対応物を求めない。
- 6) 岩井(1993, p.81)によれば、貨幣の起源については、「貨幣とはそれ自体が価値をもつ商品をその起源とし」と主張する「貨幣商品説」(マルクスはこの系譜)と、「貨幣とは…共同体の申し合わせや皇帝や君主の勅令や市民の社会契約や国家の立法にその起源をもとめることができる」と主張する「貨幣法制説」とがあるが、この二つの対立にはいまだに決着がついていない。なお、岩井自身は両説とも「神話」にほかならないとしている (Ibid., p.99)。
- 7) 「アダム・スミスは物々交換や交換の性向を事物の世界における人間のある能力の一種の複製、すなわち、本来的に人間に固有な言語・意見交換能力の一種の複製、であると考えていた」とされる(ルベイロ, 2006, p.16)。
- 8) ソシユールによる比喩の一つは、貨幣を作る素材が貨幣の価値を決定するものではないという、記号の非有形的性質に基づく言語と貨幣のアナロジーである(丸山1981, p.286)。なお、同書の「ソシユールとテル・ケル派」なる章はテル・ケル派によるソシユール解釈を批判的に論じているが、「貨幣と言語記号のアナロジー」なる副題を持つ。
- 9) 丸山(1981, p.217)によれば、「労働と賃銀、シニフィエとシニフィアンの類比自体は、原資料に存在しない編者たちの全くの創作である。」(傍点省略)
- 10) 1870年代初頭に発表されたワルラスらの新古典派の経済理論は、「古典派やマルクスの労働価値論を…特殊モデルとして葬りさることになる」のであるという(岩井, p.27)。なお、一般均衡を巡る様々な数学的理論の厳密化はワルラス以降に達成されたものも多々存在するようである。Cf. 根岸(1985)。
- 11) 森嶋(2004, p.6)によれば、「ワルラスとマルクスは互いの仕事を知らなかった」。
- 12) ルベイロ(2006, p.150)も次のように述べている。「当然、「V」という項が先の方方程式(引用者注： $V_b/V_a = p_b = m/n$)から消えなければならないと、また、交換量の逆比による価格定義だけが残されなければならないように思われる。」
- 13) ワルラスの均衡価格は連立方程式の解として与えられる。
- 14) 第1節で定義した価値(意味、artha)の場合、語の外延の変動が、場合によっては他の語の価値に影響し、諸価値は新たな均衡に達する。
- 15) 丸山(1981, p.222-223)によれば、ソシユールにとって、シニフィエ、シニフィアンはともに形相(フォルム)であって、実質(シュプスタンス)ではない。従って、「シニフィアンを《使用価値》、シニフィエを《交換価値》に類比させる、テル・ケル派の解釈は不可能となる」とされる。たしかに経済学において《使用価値》の実質性ないし物質性は必然的であろう。しかし、アナロジーの共通項を「価値表現」という点に見いだすならば、《使用価値》の実質性(物質性)は何ら妨げとはな

らないであろう。

- 16) ソシュールは、音韻変化に見えながら実は類推による「創造」の例として、ラテン語の honor を挙げる。honor は伝承形 honōs が次のような類推によって得られた新語形であるとされる（『一般言語学講義』p.226）。

ōrātōrem: ōrātor = honōrem: x
x = honor.

そして、次のように述べている。「honor と honōs とはしばらくのあいだ共存し、いずれを用いても差し支へなかった。しかしながら言語は唯一の観念にたいして二個の能記を維持することをきらうので、たいていのばあい、規則性のおとる原始形のほうが廃用に帰し、消滅する。」(Ibid., p.228. 下線は引用者) 下線部は honor と honōs の同義語性を意味するであろう。類推的創造の場合にも同義語性の経験が存在する。

- 17) ソシュールは一般論として次のように言う。「実践上では、言語状態というものは一点ではなくて、そのあいだに生じた変更の総和が極少である・多少とも長さのある時間間隔である。それは十年でもよし、一世代でも、一世紀でも、さらにそれ以上でもかまわない。」（『一般言語学講義』p.143）本稿で言う「時点」はここに言う「言語状態」の意味であると考えたい。
- 18) 数的同一性 (numerical identity) の場合は、「同じ何々」は「同じ一つの何々」に言い換えられるのに対し、質的同一性 (qualitative identity) の場合はこの言い換えができない。数的には同一とは限らない二つの個体が何らかの基準を満たすときが質的同一性である (cf. 飯田隆『同一性』『岩波哲学・思想辞典』1998)。アリストテレスは「一つ」について、それを4通りに分ける。(a) 数において一つ (質料が一つ) (b) 種において一つ (説明方式〈ロゴス〉が一つ) (c) 類において一つ (同一の述語形態〈範疇〉に属する) (d) 類比において一つ (それらの比が或る [第三の] もの他の [第四の] ものに対するがごときであるものども) (『形而上学』第5巻第6章, アリストテレス全集12, 岩波1968) そして、アリストテレスは物事の同一性(同じであること) は統一性(一つであること) の一種であると述べている (第5巻第9章)。数的同一性は (a) に、質的同一性は (b) あるいは (c) にあたるであろう。
- 19) 固有名は「非内示的」であるが一般名は「内示的 (connotative)」だとする J.S. ミルの立場に対してクリプキは次のように言う。「一方私自身の見解は、ミルは「単称」名についてはおおかた正しいが、「一般」名については誤っている、と見なす。[中略]牛であることが、つまらない意味で (trivially) 性質と見なされる場合を除けば、「牛」や「虎」のような一般名は、重要な意味では (in a significant sense) 性質を表してはいない。もちろん「牛」や「虎」は、ミルが考えたように、それらを定義するために辞書が取り上げる諸性質の連言の省略形であるわけではない。一定の性質が牛あるいは虎について必然的だということを科学が経験的に発見できるかどうかは別の問題であり、私はそれに対しては肯定的に答える。」(和訳p.151. 引用に当たり傍点は省略した。また2箇所原語を補った。) クリップキのこの議論を支えているのは次のような想定であると思える。「われわれが最初に虎を同定するために使った性質をすべて備えながら、虎ではないものがあるかもしれないのと丁度同じように、われわれが最初に虎を同定するために使った性質のどれをもたないような虎が発見されるかもしれない。」(和訳p.143. 傍点省略)
- 20) ソシュールは言語の変化(刷新)について、一個の改新が行われる地域(aire) が領域全体を覆う場合と、領域の一部にしか及ばない場合とを分け、前者はまれな事例であり、後者は普通に起こると論じている。(『一般言語学講義』p.281)
- 21) デイグナーガによれば、同義語同士は排除の関係にない。両語は同一の意味(artha) を有する。ここで語の意味(artha) は「他の排除」であるというデイグナーガの立場を一貫させるならならば、次の式が成り立たなければならない。すなわち、P, Qを同義語とするとき、(arthaの定義により $artha(P) = cov((h[P])^c)$, $artha(Q) = cov((h[Q])^c)$ であるから $cov((h[P])^c) = cov((h[Q])^c)$ 。実際、この式は成り立つ。なぜなら、詳細は省くが論理式 P, Q について、 $artha(P) \supseteq artha(Q) \Leftrightarrow h[P] \subseteq h[Q]$ が成り立ち、従って「 $artha(P) = artha(Q)$ ならば、 $h[P] = h[Q]$ 」が証明できるからである。

- 22) 新しい語が旧来の語と意味や用法を分担して共存する例として、「地震」と「なる」が次のように挙げられている。「九州では、「地震」を表すナイを小さい地震の意味として残し、ジシンを大きな地震の意味に限定して受け入れた地域もある。」(月本 2015, p.188) これによると、九州の或る地方ではナイの内包的意味が変化したことになる。ただし、感覚によって知覚可能な自然現象を表わす語、例えば「熱」「光」「音」「稲妻」などは自然種を表わす一般名辞と同様に固定指示子であるとするクリプキの議論がある(クリプキ p.158ff)。この議論によれば、自然現象「なる」の場合、感覚を通して行われる指示の固定の仕方が変化したというべきなのであろう。
- 23) 語群における語とその適用対象の截断の故を以て我々のアポーハ論的言語価値論が全く非ソーシャル的であるとの非難は成り立たない。恰もユークリッド空間の中に非ユークリッド幾何のモデルが作成できる如く、非ソーシャル的な語群に依拠しつつもソーシャル的な言語価値論のモデルを作ることが可能であらう。しかしそもそも、我々の設定するような語群は全くもって非ソーシャル的なのであろうか。
- 24) 「パナサ (panasa)」が何であるかを知らない人に、眼前の一本の樹を、手振りを伴って「これがパナサだ」と教える状況(教育的命名：対象の名前を教える)を取り上げての議論はディグナーガにあるが、「最初の命名(定義的命名)」をディグナーガは論じていない。ともあれ、ディグナーガにとって、命名においては、対象の名が知られるのであって、「語の意味(artha) が知られる」ことは否定されている (Cf. PS k.50bへの自注)。

(平成28年12月13日受理)